今月の PICK UP

『目の見えない白鳥さんとアートを見にいく』　川内 有緒/著

集英社インターナショナル 707.9カ

友人の誘いで、全盲の白鳥建二さんと美術館を巡り、その友人と共に彼に作品を解説することになった著者。絵画や仏像などの印象を言葉だけで説明することに難しさを感じますが、「正しい解説より、感想や解釈の方が違いがあるから面白い。」という白鳥さんの希望で、感じたことをそのまま言葉で伝えるようになります。やりとりが盛り上がることもしばしばで、その場の楽しい雰囲気が伝わってきます。

アート以外にも白鳥さんの子ども時代、日常生活などいろいろな話を聞く中で、「目が見えないと大変だなぁ。」と思っていた著者。それこそが、先入観や偏見だと気付き自問する姿も描かれています。読後、自分の中に固定観念はないだろうか、と改めて考えるきっかけになるのではないかと思います。

司書のおすすめ

『ドードーをめぐる堂々めぐり』　川端 裕人/著 岩波書店 488カ

1500年代に発見されてからあっという間に絶滅してしまったドードーには、生きていた頃の資料がほとんどありません。そんな伝説の鳥が江戸時代に長崎の出島にいたことを著者が知ったことがきっかけで、世界中を巡ってドードーの痕跡をたどり、その謎に迫る顛末記です。『不思議の国のアリス』や『ドラえもん』『アンパンマン』にも登場することで知られるこの鳥は、本当は一体どんな鳥だったのでしょうか。

『女子栄養大学 栄養のなるほど実験室』　吉田 企世子/監修 女子栄養大学出版部 596ジ

手に取った食材を生で食べる、煮る、焼く、揚げる、干す、どんな方法で調理したら、栄養を逃がさずに、おいしく食べられるのだろうと思った事はありませんか。

この本は、女子栄養大学の研究室で調理実験した結果、栄養はどう変わるかを科学的なデータに基づいて書かれています。キッチンでついやってしまう事が、本当は栄養成分を逃がしているかも。読めばなるほどとうなずける1冊です。

『哲夫の春休み』　斎藤 惇夫/作 金井田 英津子/画 岩波書店 913サ

1988年4月、中学校入学を控えた哲夫は、父の故郷・長岡へ一人旅をすることになりました。ところが、各駅停車の電車に乗った途中から、おかしなことが起こりはじめます。

「ガンバの冒険」シリーズの著者によるタイム・ファンタジー。幼き日の自伝として書き始められ、頓挫していた本作は、著者の息子の死を契機として再び命を吹き込まれました。著者の故郷でもある早春の長岡を舞台に、過去の家族や自分のルーツと出会い、自身の内面を見つめて成長していく少年の姿が描かれています。【児童室にあります】

『忍びの滋賀』　姫野 カオルコ/著 小学館 S914.6ヒ

隣に位置する京都の知名度や人気の高さに比べ、地味な印象がある滋賀。千葉や佐賀と間違えられる、琵琶湖や比叡山延暦寺がある県と知られていない、などなど。そんな滋賀出身の作家である著者が実体験を交えて語ったエッセイです。軽妙でユーモラスな文章に「あるある！」「そうなの？」という笑いや驚きがちりばめられています。

【地域資料コーナーにあります】